

高等学校における古典教材の研究

一 『伊勢物語』 「筒井筒」 の場合一

古本 理恵

1 はじめに

昨今の古典学習は、テキスト内容の理解よりも言語活動に重点をおいた授業が目立つ。教師が指導し易く学習者も分かり易い、授業の易化が指摘される。¹その一方で、訓詁注釈主義と呼ばれる表面的な読解のみに留まる学習も依然として行われており、両極端な学習が行われている現状にあるようである。このような古典学習の実態は、高校生の7割が古典嫌いであるという調査結果に結びついていると考えられる。²

このような現状を打開するためには、まず対象とする古典作品が学習者たちにどんなことを考えさせられるテキストなのか、表現および語りについて十分に吟味し、教材化する必要があるだろう。

テキストを読むとき、読者である学習者及び教師は、テキストが提示する「真理請求」³（ある問題領域を巡る呼びかけ）に応える必要がある。これがテキストとの「対話」であり、そのテキストをどのように受け取るか、どのように読むかが国語の授業で重要となるのである。

そこで、本研究では文学研究の側から、高等学校における古典学習の定番教材である『伊勢物語』 「筒井筒」を取り上げて、古典教材の在り方を見直し、教材「を」学ぶことと教材「で」学ぶことの両方の到達を目指し、高等学校における『伊勢物語』教材およびテキストの分析と提案を行う。

なおこの提案では学習者に付けさせたい力について、古典教育及び国語教育の目指すものに範囲に留めず、現代社会における様々な問題にまで視野を広げ、学習者がものの見方・感じ方・考え方を豊かにし、その都度ものごとを考え批判的に捉え意味づけ、変化に対応できる力の育成を目指す。

2 『伊勢物語』 「筒井筒」 の国語総合教科書採録状況

今回取り上げる『伊勢物語』 「筒井筒」は、言わずもがな高校国語教科書の定番教材である。この項では、「筒井筒」について現行の高等学校国語総合教科書の実態を報告する。なお、今後特筆しない限り、平成28年度国語総合検定教科書のことを指して“教科書”と記す。

まず、「筒井筒」の採録状況は以下の通りである。なお、301～331までの番号は、教科書の検定番号である。（※1：抜けている検定番号があるのは、現代文のみ採録されている教科書を調査対象から外しているためである。※2：◎は各教科書会社の主要教科書である。）

表1 【平成28年度国語総合検定教科書における筒井筒の採録状況】

採録箇所\教科書	東京書籍			三省堂			教育出版			大修館書店			数研出版			明治書院		筑摩書房		第一学習社			
	301	302	304	306	307	308	309	310	312	313	314	316	317	318	320	322	323	325	326	327	328		
第二場面まで						●					●		●										
一章段すべて	●	●	◎	◎	●				◎	●		◎		●	◎	◎	●	◎	●	●	●	●	

¹竹村信治『言術論—for 説話集論』笠間書院 2003

²「平成17年度高等学校教育課程実施状況」国立教育政策研究所 教育課程研究センターより。

³ H=G・ガダマー（1960）『真理と方法Ⅱ—哲学的解釈学の要綱』饗田収・巻田悦郎訳、2008、法政大学出版会

「筒井筒」教材について、この表1から、

- (1) 23教科書中21教科書で扱われている。教育出版のみ採録がない。
- (2) 三省堂308、大修館書店の314、数研出版317の三教科書のみ、第二場面までの採録となっている。

という事が分かる。教育出版を除くすべての教科書で「筒井筒」が採録されており、各教科書会社の教科書の中でも習熟度の低い学習者を想定した教科書では、河内女の登場する第三場面を省いた採録となることがあるようである。

次に、「筒井筒」教材に付けられた学習の手引き（各教材の末尾に付けられる小問のこと）について、その内容の分析結果を示す。各教科書の学習の手引きで問われている内容を整理すると、以下の表2の通りである。この表2から、「筒井筒」教材で扱われ易い問題が分かる。

表2【「筒井筒」頻出する手引きの内容】

頻出する手引きの内容	手引き															
	東京書籍 302-304	301	三省堂 306-307	308	教育出版	大修館書店 312-313	314	316	317	明治書院 318-320	筑摩書房 322-823	325	326	327-828	330-831	
物語全体の要旨・展開	○	○	○						○		○					5
大和女と河内女の比較	○	○				○				○	○				○	6
「筒井筒」「くらべこし」の和歌解釈	○					○	○	○	○	○					○	9
河内女の和歌(心情)解釈			○	○			○						○	○		5
「本意」の具体													○	○	○	3
男が「行かずなりにけり」となった原因・理由			○			○							○	○	○	6

(1) よく問われる内容

全体を問う…物語全体の要旨・展開(5種) / 大和女と河内女の比較(6種)

和歌解釈を問う…「筒井筒」「くらべこし」の和歌解釈(9種) / 河内女の和歌(心情)解釈(5種)

部分(核)を問う…「本意」の具体(3種) / 男が「行かずなりにけり」となった原因・理由(6種)

(2) 第一場面の贈答歌の解釈が最も多く、第一場面の二人の関係性を読み取る問題が多く、この部分が物語において重要な部分と考えられていることが分かる。

(3) 女の比較と第二場面での男の心情・言動を問うが多い。これは「筒井筒」が男中心に書かれた物語で、男中心に物語が読解され手引きが作成される傾向にあることを示している。

また、各教科書会社の手引きについて、「筒井筒」のどの部分を読んだら解答できるか、物語の展開に対応させると、次のような表にまとめることができる。

表3【物語の展開と各教科書会社の手引きの対応表】

	展開	手引き														
		東京書籍 302-304	301	三省堂 306-307	308	教育出版	大修館書店 312-313	314	316	317	明治書院 318-320	筑摩書房 322-823	325	326	327-828	330-831
第一場面	井のもとにいでて遊びける (幼少期に井原の周りで遊ぶ)															
	恥かしてありけれど(中略)悔めと思ふ (大人になり、互いに結婚の意思があるも結婚して居ない)				4.5		2					読2表1	学4	学4	学2	表3
	妻の命はずれども聞かでない (女の親が別の男と結婚を勧めるが聞かない)	語表 ①-1,2			5		2				言1-1					
第二場面	「筒井筒」～「くらべこし」の贈答歌 (贈答歌により互いの思いを伝え合う)	②		三①、一①	1	1	1.2	1.言表1	学1	こ1,こ2	研1					読1表3
	ついに本意のごとくおひにけり (結婚し)					2								学1、学4	学1	
	親なく頼りなくなる (女の親が亡くなり経済状況が悪化する)	語表 ①-3		一②							言表1					
第三場面	いき溜ふ所いできにけり (男に別に通う場所ができる)	語表 ①-3		二①	4										学4	読2
	離しとおもへるけしきなき (男が別々の女と関係をもたせ出す)	③	2		2.4	2.3	3			研2	読3					読2、発4
	離心ありてかかにもやあらむ (男は女の浮気を感じ、前世に堕れ種子を殖やう)	③	2	一③、二②	2		2	3			言表1	読2	読3	学1	学2	学2
第四場面	いとうよう化載して、うちながめて (女が化粧し物思いに耽っている)	③	2		3	2	3			研2	読3	研3	学1	学2	学2	読2、発4
	「重收げば」の和歌 (女が島津はげの和歌を詠む)	③	2	三②、二③	1.3	2	3	1	学1	研2	読3	研3	学1	学2	学2	読2、発4
	「筒井筒」～「くらべこし」の和歌 (男は別の女の元へいくのを疑う)				3		3				読2	読3	学1	学2	学2	読2
第五場面	初めこそ心にくもつづけり、今はうちとけて (男は河内女の下心な振る舞いを見て恐れなくなる)	③	2			2					研2	読3表1	学4		学2	発4
	「書があたり」の和歌 (河内女は別に求婚の和歌「書があたり」を詠る)	③、語表 ①-4				2			1		研2	言1-2	読3			発4
	「来む」といへり、書びて待つに、たびたび過ぎぬれば (男は「来む」といへり、しんがらぬと来ない)						2								学3	学3
第六場面	「来む」といへり、書びて待つに、たびたび過ぎぬれば (河内女は「来む」といへり、しんがらぬと来ない)	③	2			2			1		研2	読3		学3	学3	発4

(1) 出題箇所として最も多いのは、大和女の詠んだ「風吹けば～」の和歌部分で、すべての教科書がこの和歌について手引きを設けている。

(2) 「風吹けば～」の和歌以外のどの和歌も、出題傾向が高い。(出題頻度の高い順に、「風吹けば～」、「君来むと～」、「筒井筒～」と「くらべこし～」、「君があたり～」)

(3) 和歌について出題傾向の高いのは、第一場面の「恥かはしてありけれど～得めと思ふ」の男女の相思相愛の場面と「河内へも行かずなりにけり」という第二場面の締めくくりの部分である。

(4) 特に出題傾向の低いのは、「本意」と二人の恋が成就した場面、「親なく頼りなく」という事情が一転した場面、男の「来む」という言葉に喜び待つ河内女の場面、の三つである。

【手引きの分析より】

『伊勢物語』の歌物語という性質上、読解の要となるものは和歌である。特に、「風吹けば」の和歌は、男と大和女の関係が回復するきっかけであり、「筒井筒」の中で最も重要な部分としてすべての教科書に採録されていた。

教科書によって、各場面での展開を網羅的にたどるものもあれば、一部分のみを読解させるものもあった。しかし、『伊勢物語』は、無駄な言葉を一切そぎ落とし、すべての地の文を、和歌を読むための回路として徹底する姿勢がみられる作品である。よって、どの言葉も見逃すことはできず、すべてを網羅的に読んで答える手引きの方が適当であろうと考える。

これらの手引きの分析の結果、「筒井筒」教材の手引きのポイントは、以下の4点に集約される。

- ・第一場面での、男女の思いの強さが文法事項から確認できている。
- ・第一場面と第二場面の内容が、男女の言動に着目しておさえられている。
- ・第一場面と第二場面のつながりを問う問題がある。
- ・第三場面の高安の女が選ばれなかった理由を和歌も含めて検討されている。

また、いずれの教科書も教材「を」学ぶ“内容読解”に力を入れていることは分かるが、教材「で」学ぶことについては明確に示されているとは言えない。読解をすることで、作品が提示したある問題領域を明らかにし、作品の真理請求に学習者が応えうような手引きが必要である。そのような学習によってはじめて、その作品を教材とする価値が生まれるのである。

3 『伊勢物語』「筒井筒」を読む

(1) 第一場面～幼少期の意味～

『伊勢物語』「筒井筒」の第一場面は、幼少期から育まれた男女の愛とその関係性を描くことに専念される。それは表現の細部にも見てとれる。展開に即して表現を読んでいく。

幼少期「井のもとに出でて遊」んでいた二人はやがて成人し、結婚適齢期になるのを待ちわびたように「男も女も恥かはしてありけれど」と恥じらいや気恥ずかしさをもちつつも、「男はこの女をこそ得めと思ふ、女はこの男をと思ひつつ」と係り結び表現で互いに強く思い意識し合う様子が表現されている。また、「親のあはずれども聞かでなむありける」というように、親から他の男との結婚話を勧められても、動じず断固として聞き入れない、男に対する女の強い愛情が、ここでも係り結びを用いて表現されている。

そして、プロポーズともなる「筒井筒」の和歌が男から送られ、女もそれに応えた「くらべこし」

の和歌を送る。内容はともに、仲良く遊んでいた幼少期から成長した自分たちを詠み、結婚の意思を確認するものである。ここで注目したいのが、和歌の構成と助詞である。男の和歌は「筒井筒井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに」と井筒と背比べした過去（過去の助動詞「き」）と、背丈が井筒を越した現在（完了の助動詞「ぬ」）が詠まれているのに対し、女の和歌は、「比べこし振り分け髪も肩すぎぬ君ならずしてたれかあぐべき」と髪の長さを比べ合った過去（過去の助動詞「き」）と子供の髪型である振り分け髪を卒業して肩を過ぎる髪をもつ現在（完了の助動詞「ぬ」）に加え、その髪を結び上げて男の妻となる未来（当然の助動詞「べし」）も詠み込まれているのである。つまり、女は男の和歌に二人が結婚する「未来」を付け加えて応えたのである。

第一場面の末に「いひいひて」とあるように、二人はこのような愛情を確認し合うやり取りを繰り返して、関係性を築きあげ「つひに本意のごとくあひにけり」と長年の「本意」を成就させたのである。

このように第一場面は、二人の築いていった関係性や互いを思う愛情が綿密に描かれており、これが、この後に続く物語の展開を意味付けるのである。

（2）第二場面～待つ女の姿の意味～

第二場面の冒頭で、「女、親なく、頼りなくなるまに」と女側の経済状況が悪くなり、「もろともにいふかひなくてあらんやは」と男は不本意にも別の女を設けることを余儀なくされる、という状況が描き出される。この場面では、このような状況の中での女の反応（振舞い・心のもち様）に焦点があてられている。

女はこのような状況に対し、「あしと思へる気色もなく、いだしやしければ」と特に何の反応もなく男を新しい女のもとに送り出している。これは『古今和歌集』『大和物語』『十訓抄』などの「筒井筒」同話群に登場する女たちとの比較を行うことでより浮彫りになるのだが、『伊勢物語』の女は良いか悪いかという善悪によって、別の女を設けるという男の行為を判断しており、「ねたげ」「つらげ」と感情的に表現される同話群の女たちとは全く異なる態度である。女は、男の行為を良いか悪いかの出来事として受け入れているのである。

夫の浮気を了解する女の「物分かりのよさ」が表現される一方で、女のこのような淡泊な反応に対して男は「異心ありてかかるにやあらむ」と女の浮気を疑う。

そして、男が「前栽の中に隠れみて、河内にいぬるかほにて見れば」と自分を見送った後の女の様子を垣間見ると、「いとう化粧じてうちながめて」しているのである。化粧は身なりを整える行為であり、愛する男のためにするものである。そして、ぼんやりと物思いに耽って発せられるのは、別の女のもとに出かけた自分の安否を気遣う和歌なのである。女のどの行為も、女の心がひたすらに男に向けられていたから行われるものなのである。男はこれに気づき、「かぎりなくかなしと思ひて、河内へもいかずなりにけり」とこの元の女の許へと帰ってくるのである。女の異心を疑い一度は離れかけた男の心が、女の自分に対する愛情を再発見したことによって女に向かい直り、再び関係が築きなおされるのである。

（3）第三場面～高安の女登場の意味～

第三場面では、高安の女を登場させ、高安の女と男との関係の破綻が描かれる。

まず、破綻の要因として、「手づから飯匙とりて、笥子のうつはものにもりける」と高安の女が品の無い行動をとり、男を「心憂がりて」と幻滅させた点が挙げられる。「はじめこそ心にくもつく

りけれ、今は打ち解けて」とあるように、交際当初にはあった恥じらいや礼儀を保てなかったことが「行かずなりにけり」と高安の女の許を去っていった理由として描かれる。

二つ目の要因として、女の和歌に詠まれる心が自分本位のものである点である。一つ目の和歌「君があたり見つつ居らん生駒山雲なくしそ雨は降るとも」は、「大和の方を見やりて」と男の方に目を向けてはいるが、その内容は、男の姿が見えなくなってしまうから雲で隠さないで欲しいと、自分中心に詠まれた和歌である。男の身を案じた大和の女の和歌とは対照的である。これに対して、男は「からうじて、大和人、「来む」といへり」という決して良くはない評価であり、「よるこびて待つに、たびたび過ぎぬれば」という表現から、最終的には高安の女の許へは行かなかったようである。一首目の和歌の結果、高安の女は男の心を動かすことができなかつたということであろう。二首目の和歌「君来むといひし夜ごとに過ぎぬれば頼まぬもの恋ひつつぞ経る」は、自分の許へ「来る」といったのに来なかつた男を恨む、訪れを催促する和歌である。この和歌に対する男の評価は「住まずなりにけり」であり、最終的に高安の女との恋愛は破綻するのである。これも、一切恨みつらみといった感情を出さなかつた大和の女と対照的に描かれている。

男の求める、そして物語の提起する理想の女像、及び理想の関係性を描き出すためには、比較材料として第三段落での高安の女は必要だったのである。

(4) 作品が提起する問題

では、この物語は何を語ろうとしているのか。何を問題として読者に提起しようとしているのか。

「筒井筒」は、各場面をそれぞれ完結した物語として独立させて読むこともできる。実際、同話のほとんどは第二場面のみ描かれ、第一場面の幼少期の話題をもつものは「筒井筒」のみである。

それでは、これらの三つの話題「幼少期の恋愛を实らせて結婚した話」と「男に新しい女が出来たが元の女の心・振舞いによって男が戻ってくる話」と「男が女（高安）に幻滅して通うのをやめた話」が組み合わせられることで、どんな物語になり何が読み取れるであろうか。それは、男女関係（広くいえば人間関係でもある）の理想の在り方である。

ところで、第二場面で、女は男の河内通いに対して「あしと思へる気色もなく」と動じなかつたのは何故か。それは、実は「物わかりのいい女」であるからではなく、第一場面に描かれたような関係性があつたため、女は男の心が自分から離れていく心配がなかつたからである。女にとって心配なのは、二人の関係性ではなく道中の夫の身の安全なのである。男は女の思いやりを「かぎりなくかなし」と受け取り、「河内へも行かずなりにける」という行動によって応える。このような二人の応答関係は、第一場面の和歌の贈答でも確認できる。第一場面では男からの発信に対して女が応答しているが、この第二場面では女からの発信に対して男が応答している。つまり、相互に応答しあっており、対話が成立しているのである。これに対して、第三場面の高安の女と男とでは、女が一方的に呼びかけるだけで、男からの応答はなく対話が成立していない。そもそも人間関係を成立させるためには、応答関係にある必要があるのである。理想の男女関係（人間関係）の在り方とは、相互に築かれた信頼関係に基づく応答関係があり、その応答が互いを思いやりあうものであるというのが、この一連の物語「筒井筒」の男女関係（人間関係）を巡った真理請求なのである。

4 「筒井筒」学習の提案

現行の国語総合教科書での「筒井筒」教材の扱われ方と、作品としての「筒井筒」の特徴を踏まえ、国語総合の授業での具体的な扱い方として、「学習の手引き」「板書計画」「発問」を以下の通り

に提案する。なお、「学習の手引き」については、「学びの手引き」では教材「を」、「考えてみよう」では教材「で」を担うよう考案した。

「学びの手引き」では、文法を中心とした表現などに注目しながら、登場人物の心情や言動を読み取る。具体的には、第一場面の男女の相互の強い思いのかけ方や応答関係を読み取りや、第二場面の展開やそれに伴うそれぞれの心情についての読み取りを中心に行う。

「考えてみよう」では、前項でも述べた「作品が示す男女関係の理想的な在り方（＝応答関係、信頼関係、相互の思い遣り）」を、「学習の手引き」での読解をもとに、「筒井筒」の真理請求を受け取る。具体的には、大和の女と第三場面で登場する高安の女との比較により、男女関係の理想を読み取る。また、「筒井筒」が男本意に物語が語られていることに注目させ、語りの存在に気づかせる。「筒井筒」は、「河内へもいかずなりにけり」「心憂がりて、いかずなりにけり」「男、住まずなりにけり」と、それが大和の女の場合であっても高安の女の場合であっても、男が恋愛の行方を握っている。男の選択次第で関係性が存続されるか破綻するか決まる、男優位の恋愛関係が描かれているのである。また、男の河内通いに対して「もとの女、あしと思へる気色もなく」という表現から、これは女の心情ではなく、語り手および男の目にそのように映っただけであり、真偽のほどはわからない。このような、作品にみられるものの見方・感じ方・考え方を物語の表現から読み取り、自分や現代のものの見方・感じ方・考え方と比べ、自分の考えをもつ問いを設ける。

学びの手引き 1

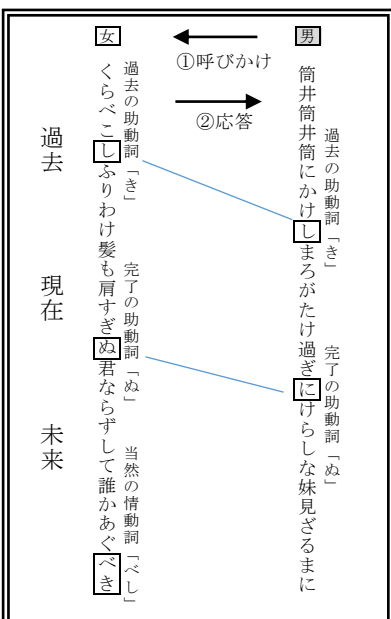
1 傍線部に注目して現代語訳しよう。

①男はこの女をこそ得め

②親のあはすれども聞かでなむありける

2 助動詞の「ど」を抜出、その意味や効果について調べよう。

3 「くらべこし」の歌から助動詞「し」「ぬ」「べき」の意味に注目して現代語訳してみよう。



Q 1—①—A 係り結びの「こそ」＋已然形に注目して現代語訳してみよう。

Q 1—①—B 後に続く「女はこの男をと思ひつつ」には何が省略されているだろう。

Q 1—②—A 傍線部のうち、特に「ども」の意味や効果に気を付けて訳してみよう。

Q 1—②—B 「あふ」の意味を辞書でひいて、適切な訳をつけよう。

Q 2 助動詞の「ど」を抜出、その意味や効果について調べよう。

Q 3 「くらべこし」の歌から助動詞「し」「ぬ」「べき」の意味に注目して現代語訳してみよう。

学びの手引き1では助動詞や係り結びなどの文法事項に注目することで、発話者の思いや、語り手の伝えようとしている内容や意図が表明されていき、語りに即して読む練習になると考えられる。また、これらの問いによって「筒井筒」で語られる男女がどのような関係性にあっただか確認することができる。

《実際の授業では一発問の解説―》

Q1―①―A 幼かった二人がやがて大人になり、男が心の中で「この女を妻にしよう」という女に対する強い愛情が表れた部分であり、係り結びの「こそ」＋已然形に注目することで、男の「女を得たい」という思いの強さが確認できる。

Q1―①―B 実際の授業では、これに続く「女はこの男をと思ひつつ」を取り上げ、省略されている部分を学習者に考えさせ、男女が互いに強く「得たい＝結婚したい」と思っていたことを確認する。これが、第一段落末の「本意」であることも折に触れて言及するとよい。

Q1―②―A 女の親が年頃になった娘に対し、他の男との縁談を勧めるが聞く耳をもたないという部分である。まず後半部分「聞かでなむありける」の打消接続「で」と、強調の意をもつ係り結び「なむ」＋連体形に気を付けて訳をつけさせる。そして、女は何を聞かなかったのか、逆接「ども」(…けれども)に着目させて読み取らせる。

Q1―②―B 「あふ(＝結婚する)」という古語も古典重要単語として十分に理解させ、単なる「面会」ではなく「結婚」であり、事態の大きさに注意させ、女の男への愛情が確固たるものであるということを確認する。

Q2 「ど」が用いられる場面は、第一場面の「恥ぢかはしてありけれど」と第二場面の「さりけれど」の二か所である。授業では、「ど」を本文中から探させた後、「ど」が「～が／～のに／～けれども」といった逆接の用法であり、「ど」に続く文が強調される効果があることを予め確認しておく必要がある。①一つ目の「ど」は「(お互いに恥ぢかしがっていたが)互いにこの人と結婚したいと思っていた」ということが確認され、これによって男女が恥ぢかしさにも勝って強く思い合っていた事が確認できる。②二つ目の「ど」では、まず「さり(さ＋あり)けれど」の「さ」の部分が「河内の国、高安の郡に、いき通ふ所いでにきけり」であることを確認する。次に「さりけれど、このもとの女、あしと思へるけしきもなくていだしやりければ」まで読み、「(男に別の女ができたが)妻は動じなかった」ことを確認し、どうして女が動じなかったのか学習者に問うて、女の男に対する信頼の強さを読み取らせる。

Q3 まず、それぞれの助動詞の意味と活用形について確認する。「し」過去の助動詞「き」終止形／「ぬ」完了の助動詞「ぬ」終止形／「べき」当然の助動詞「べし」連体形)

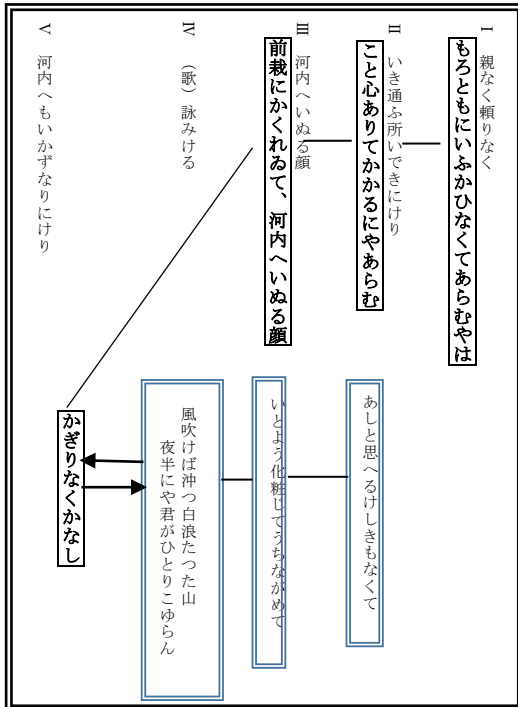
「振り分け髪」と「上ぐ」という状態がどのような状態か脚注を参考に理解させ、子供の髪型(振り分け髪)から成人した女性の髪型(上げ髪)に手を加えるのが夫の役目であったことを学習者に伝える。主要な助動詞と難解な語句が分かった後は、学習者自身で和歌を読み取らせ(大意を掴ませ)てみてよいだろう。

だいたいの訳が定まったら、「くらべこし／振り分け髪も肩すぎぬ／君ならずしてたれかあぐべき」に分け、先ほど確認した助動詞に注目して、それぞれいつのことをいっているのか確認し、「背丈を比べていた過去」「振り分け髪が伸びきってしまった現在」「髪上げて結婚する未来」をいっていることを読み取る。そして、この和歌が贈答歌に対する返歌であることを確認し、男の和歌を読ませ「かけしまろがたけ」「過ぎにけらしな」と「くらべこし～」の和歌と同様に過去の助動詞「き」

と完了の助動詞「ぬ」があることに着目させる。女がこの和歌への返歌として、「未来」を付け加え、男の求愛に応えたことに気づかせることで、互いが過去の思い出を大切に、同じ思いでいたことが確認できる。

学びの手引き 2

「さて、…行かずなりにけり。」の部分での男の気持ちを表す言葉を、順を追って抜き出し、それが女のどのような事情や態度によっているか考えてみよう。



- Q1 第二場面での出来事を書き出して、展開をおさえよう。
- Q2 (展開Ⅰについて) どうして「女、親なく～いふかひなくてあらむやは」なのか、当時の結婚生活について文献を読もう。
- Q3 (展開Ⅳについて) どうして女は「化粧じて」「うちながめ」たのか、和歌の内容とあわせて考えよう。
- Q4 (展開Ⅴについて) 「かなし」の意味を辞書で調べよう。
- Q5 男の気持ちを表す言葉を展開に即して抜き出し、女の事情や態度と対応させて考えてみよう。

学びの手引き 2 は、男に愛人（河内女）ができるところから、その愛人のもとへ行くのをやめる第二場面の内容を読み取る問題である。これは、男の心情と女の言動を関連させて、表現に即して読み解く問いであり、第二場面の展開が確認されるだけでなく、女のどのような言動・態度が男の心を動かし、人間関係を修復させたのか考えることができる。

《実際の授業では—発問の解説—》

Q1 男女の心の動きを理解するために、まず、第二場面の展開を出来事順に書き出させる。以下の5展開に分けられる。

- 「Ⅰ 女、親なく頼りなくなる（女の親が亡くなり経済的に不安定になる）」
- 「Ⅱ いき通ふ所いできにけり（男が河内女のもとへいくようになる）」
- 「Ⅲ 前裁にかくれるて、河内へいぬるかほ（男が女の様子を垣間見する）」
- 「Ⅳ 風吹けば～君がひとりこゆらん（大和女が男の身を案じる歌をよむ）」
- 「Ⅴ 河内へもいかずなりにけり（男は河内へ行かなくなる）」

Q2 Iの展開を理解するために、女親の経済的な後ろ盾によって結婚生活が成り立っていたという当時の時代状況を理解する必要がある。そのために、教師が当時の結婚生活について書かれた文献を用意するなどの指導の手だてが有効であろう。

Q3 IVの展開を理解するために、和歌の内容読解と「化粧」「うちながめ」の行為の意味について考えさせる。女が男を思いやり、河内へいく道中の身の安否を気遣っていたことに気づかせる。

Q4 Vの展開を理解するために、「かなし」の意味を辞書で引かせ、ふさわしい訳を考えることで、「かなし」は現代の意味とは異なり「愛しい」という意味であることに気づかせる。

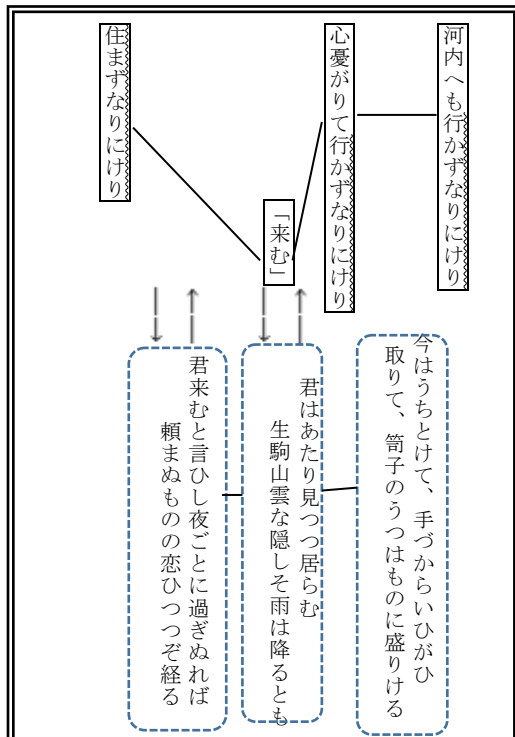
Q5 これらの展開に即して男の心内語を当てはめ、表現にそくして男の心情を深め、展開と女の言動との関連性をおさえる。

IとIIの間「もろともにいふかひなくてあらんやは」…反語「やは」に注目して愛人をつくるほかなかったという男の言い分を読み取らせる。これによって、河内への訪れは、女に対する愛情が冷めたわけではなく、男にとっても不本意な出来事であったとことが確認できる。

IIとIIIの間「こと心ありてかかるにやあらむ」…「かかる」が「あしと思へるけしきもなくて、いだしやりければ」を指すことを確認する。これによって、本来なら嫉妬して当然のはずなのに、女が男を送り出したので、男が不審に思ったことを確認する。また、「あしと思へるけしきもなくて、いだしや」った女には、男に対する強い信頼があり、それは第一段落で描かれた長年にわたる二人の関係性から考えられるということを確認する。

IVとVの間「かなし」…上述の通り辞書で意味や用法を確認させ、「化粧」「うちながめ」身の安否を気遣う和歌を読む女の自分への気配りが男に「かなし」と思わせたことを確認する。

考えてみよう1
男と大和女の関係と男と河内女の関係の違いについて考えてみよう。

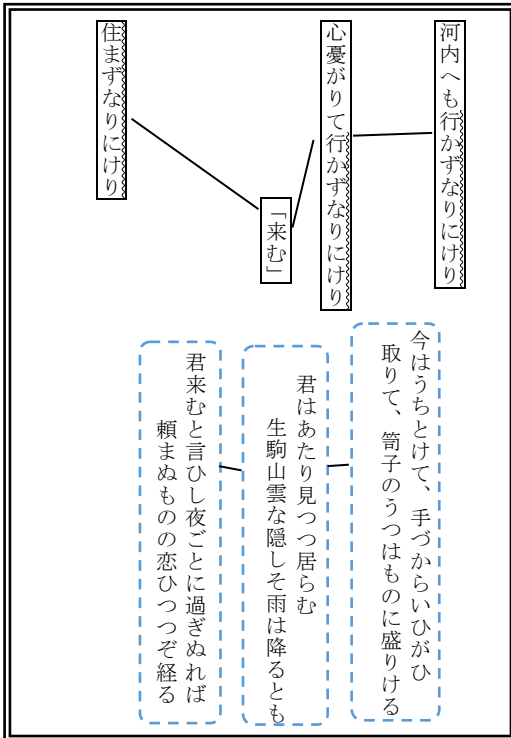


- Q1 男—大和女、男—河内女、それぞれのやり取りの対応関係を抜き出してみよう。
- Q2 抜き出した対応関係図から、男女関係を成り立たせているのは何か考えてみよう。

男一大和女、男一河内女、それぞれのやり取りの対応関係に注目することで、何が男女関係を成り立たせるのかに気づかせる。男一大和女の場合は、相互に働きかけ受け入れている関係であり男女関係が成立しているといえる。一方で男一河内女の場合は、河内女からの一方通行の思いのみであり、男はそれに対して「行かず」「住まず」と拒否していることが分かる。

考えてみよう2

「筒井筒」は誰が中心になって展開している物語か、考えてみよう。



- Q1 物語は「河内にも行かずなりにけり」「心憂がりて行かずなりにけり」「住まずなりにけり」と結論づけている。このような形で物語を語る作者の男女関係についての考え方はどのようなものか。
- Q2 また、その考え方に対して、あなたはどのように考えるか。

「いき通ふ所いできにけり」「河内へもいかずなりにけり」「いかずなりにけり」「すまずなりにけり」というように、男は大和女と河内女との関係の決定権を持っていることに気づかせる。

作者が、「最終決を下すのは男」という形で物語を描いたのはなぜかを考えさせ、男が拒否するか受け入れるかによって恋愛が決まってしまうという男本意の物語であることに気づかせる。また、そこから、作者が男性であると考えられることにも言及する。

大和女は男に対して、男のことを親身に考え常に愛情と気配りをもって接していたが、河内女は自分本位な愛情しかもっておらず、また男への配慮や気配りが無かったために男との関係が築けなかったのである。これを「行く」「行かず」によって男が女たちを評価しているといえる。そのような書きぶりにも注目させ、「筒井筒」が示すものの考え方にもふれる。

5 おわりに

今回は、「筒井筒」教材について、国語総合の授業で扱った場合、どのような学習が可能か提案し

たのだが、高等学校における3年間の古典学習を見据え、古典Aや古典Bの場合についてもそれぞれ学習指導要領のカリキュラムに沿った学習の段階性を考慮した教材提案が必要になるだろう。例えば、古典Aでは、「筒井筒」の類話（『今昔物語集』）読んで比較し、『今昔物語集』の方が、『伊勢物語』よりも後の作品であるにも関わらず男女相互の情けを描く『伊勢物語』の方が、男の情けのみを描いた『今昔物語集』よりも進歩した価値観をもっているということに気づかせ、伝統的な言語文化に対する理解を深めるといった学習ができるだろう。また、古典Bでは、「筒井筒」の同話（『古今和歌集』『大和物語』『十訓抄』）を扱い、各話の設定の違いや男女の言動、心のもち方の違いを比較し、同様の出来事でも語り方によって全く異なる話になることを知り、語りに対して理解を深めるといった学習ができるだろう。

今や、教材「で」学ぶ、教材「を」学ぶのどちらか一方だけでは、学習者が古典を学ぶ意義を実感しづらくなっている。「で」なら「なぜこの教材でなければならないのか」、「を」なら「なぜこの教材を学ぶ必要があるのか」という疑問が立ちはだかる。「で」と「を」の両側から考え、これらが交錯する点を見つけ出し、教材化していくことが求められる。今後も、教材「で」と教材「を」の二つの領域の重なる部分を求めて、古典学習を追求していく必要があるだろう。

参考・引用文献

- ・『竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語』新編日本古典文学全集 12、小学館、2004年
- ・『伊勢物語』新潮日本古典文学集成、新潮社、1976年
- ・三角洋一ほか『新編国語総合』東京書籍（検定番号 301）平成 24 年 3 月 5 日
- ・三角洋一ほか『精選国語総合』東京書籍（検定番号 302）平成 24 年 3 月 5 日
- ・三角洋一ほか『国語総合古典編』東京書籍（検定番号 304）平成 24 年 3 月 5 日
- ・中渕正堯ほか『高等学校国語総合古典編』三省堂（検定番号 306）平成 24 年 3 月 5 日
- ・中渕正堯ほか『精選国語総合』三省堂（検定番号 307）平成 24 年 3 月 5 日
- ・中渕正堯ほか『明解国語総合』三省堂（検定番号 308）平成 24 年 3 月 5 日
- ・井口時男ほか『国語総合』教育出版（検定番号 309）平成 24 年 3 月 5 日
- ・影山輝國ほか『新編国語総合言葉の世界へ』教育出版（検定番号 310）平成 24 年 3 月 5 日
- ・北原保雄ほか『国語総合古典編』大修館書店（検定番号 312）平成 24 年 3 月 5 日
- ・北原保雄ほか『精選国語総合』大修館書店（検定番号 313）平成 24 年 3 月 5 日
- ・北原保雄ほか『新編国語総合』大修館書店（検定番号 314）平成 24 年 3 月 5 日
- ・坪内稔典ほか『国語総合古典編』数研出版（検定番号 316）平成 24 年 3 月 5 日
- ・坪内稔典ほか『高等学校国語総合』数研出版（検定番号 317）平成 24 年 3 月 5 日
- ・久保田淳ほか『高等学校国語総合』明治書院（検定番号 318）平成 24 年 3 月 5 日
- ・久保田淳ほか『精選国語総合古典編』明治書院（検定番号 320）平成 24 年 3 月 5 日
- ・安藤宏ほか『精選国語総合古典編』筑摩書房（検定番号 322）平成 24 年 3 月 5 日
- ・紅野謙介ほか『国語総合』筑摩書房（検定番号 323）平成 24 年 3 月 5 日
- ・東郷克美ほか『高等学校新訂国語総合古典編』第一学習社（検定番号 325）平成 24 年 3 月 5 日
- ・東郷克美ほか『高等学校国語総合』第一学習社（検定番号 326）平成 24 年 3 月 5 日

- ・ 東郷克美ほか『高等学校標準国語総合』第一学習社（検定番号 327）平成 24 年 3 月 5 日
- ・ 東郷克美ほか『高等学校新編国語総合』第一学習社（検定番号 328）平成 24 年 3 月 5 日
- ・ 亀井秀雄ほか『探求国語総合 古典編』桐原書店（検定番号 330）平成 24 年 3 月 5 日
- ・ 亀井秀雄ほか『国語総合』桐原書店（検定番号 331）平成 24 年 3 月 5 日
- ・ 竹村信治『言術論—for 説話集論』笠間書院、2003
- ・ H=G・ガダマー（1960）『真理と方法Ⅱ—哲学的解釈学の要綱』響田収・巻田悦郎訳、法政大学出版会、2008
- ・ 前田雅之『古典論考—日本という視座』新典社 2014 年
- ・ 須藤敬『古文教材の考察と実践—教育と研究のフィールドをつないで—』おうふう刊 2014 年
- ・ 竹村信治「研究者が国語教育を考えるとということ—「言説の資源」をめぐる—」『レポート笠間 57』笠間書院、2014
- ・ 信木伸一「言説を問題化する学習の試み—古文教材の場合—」『problematique III』、2002

（清水ヶ丘高等学校）